共感に関する研究 (3)

——心態の分析を中心として——

山岡　哲雄

I.1　模倣の理論

共感の心理を考えるために,ここでは,模倣と共感の問題から議論を進めたい.

模倣の心理については，従来多くの説明が提出されて来ているが，まだ決定的な説が現われているとはいえないのが現状である.

これまでに出された模倣の理論は，大別すると，模倣の先天説と後天説とに分けられる．先天説は主として W. James, W. Boldwin, C.L. Morgan 等，歴史的には初期の人々によって唱えられたものであって，模倣行動は，動物の本能的なものに帰すべきであるという考え方である．従って，先天説によれば，模倣行動は，動物にそのような潜在能力があって，これがモデルの行動を知覚することによってひき出されてくる，いわば衝動的行動であり，動物が，特に報酬などによって強化されなくても，それ以前の段階で，すでに模倣行動を始める，ということが強調される．これに対して，後天説は，比較的新しい学説であって，主として学習理論の一部として，L. T.Hobhouse, E. B.Holt（古典的条件づけ説)，N. E.Miller と J. Dollard(動因低減説)，O. H. Mowrer (自閉強化説，共感学習説)，A. Bandura（象徴過程説）等がこの立場を代表している．この他に，精神発達学の側から，J. Piaget や H. Wallon 等の模倣理論が出されているが，概ね，後天説の立場をとっている．模倣の後天説は，模倣行動は，動物に生れながらに備わった行動ではなく，後天的に獲得され学習され，報酬によって強化される行動であるという立場である.

現在の模倣理論の趨勢は，先天説より後天説に傾いている．つまり，現在では「模倣行動」は一応学習の範疇に組み入れられている．このことは,「模倣」

つまり、まねるという行動そのものも，後天的に獲得された行動様式の一つである，ということになるのであるが，模倣行動にも様々な質的に異なったレベルのものがあるので，そのすべてを後天的に獲得した行動様式と決めてしまってよいかどうかについては，幾分，議論の余地が残されているように思われる．

確かに，多くの研究報告で，模倣行動は獲得され，報酬によって強化され，更に一般的な学習と同様に，その効果が転移することが知られている．しかしそれにもかかわらず，このような模倣行動を動物や人間にひきおこす原動力のようなもの，内的な衝動といったものが，やはりあるのではないか，又模倣行動は，報酬によって強化されうるとしても，最初に，動物や人間が模倣行動を行いはじめる潜在的能力を，やはりもっているのではないか，という考えを否定することはできない．

このような考え方は，勿論，先に紹介した二つの立場の模倣理論の中にもうかがわれる．Morgan は，模倣には，本能的，知能的，反省的の3段階があることを認めており，又，G.W. Allport も模倣には，反響的，無意識的，意識的の3段階が区別されることを指摘している．一方，Bandura は，模倣の学習説をとってはいるが，その際，動物や人間は，モデルと同一の行動をしたり，又そのための報酬を与えられたりしない場合にも，すでにモデルの行動を象徴的にリハーサルする能力をもっていることが，模倣成立のために必要な条件であると考えている．Mowrer は，彼の自閉強化説をこの方向へ修正して，共感学習説へ発展させた．こうした考え方は，明らかに模倣の先天説と後天説をつなぐものであり，上述の疑問への一つの解答であるといえよう．

模倣行動を詳細に検討してみると，模倣行動の起り方とその性質は，多岐にわたっており，先天，後天のいずれか一方の立場のみで説明し尽すことが困難であることは明らかである．

著者は，模倣行動は，少なくとも (1) 衝動的レベルのもの，(2) 思わずそうしてしまっているもの，(3) 多少意識的なものが入っているが，見たものをその場で一部始終まねるもの，(4) モデルが不在のとき，同じことをしているもの，(5) 意識的な模倣（流行，打算，アイドルやボスのまね），等の5段階に

分けうると考えている．この各段階が，その段階に応じて，先天的要素と後天的要素のいずれかにより多く関与しているといえる．そして習性的・本能的レベルのものから社会的学習へ至る序列が考えられる．このような考えから，上述の模倣行動に関する諸説の内 Bandura の象徴過程説および Mowrer の共感学習説の立場が，最も現実的で無理のない模倣理論であると考えられる．

I.2 模倣と同一視

模倣行動の最も大きな特質は，模倣者がモデルと同一の行動をとろうとし，又同一の行動をとるところにある．このような行動が，模倣者が本来もっている性質によるものか，あるいは後から学習することによって獲得された性質であるかについては，議論が分れる．このことについては，すでに述べた通りである．ただ，いずれにしても，模倣者の側に「モデルと同一の行動をとろう」とする心理が働いているとすれば，模倣者が模倣行動をとるに際して，モデルとの同一視の心理状態にあると考えざるを得ない．

このような現象を現わしていると思われる模倣行動を，著者の観察例の中から，以下幾つか紹介して検討を加えたい．

〔例 1〕 1歳7カ月の男児：テレビのピンポンパンを見ていて，テレビのお兄さんの体操に合せて，思わず，ピョンピョン一緒にとびはねる．

〔例 2〕 1歳5カ月の男児：子供を背負ったまま，親が重い荷物を持ち上げると，背中の子供もやはりウンウンと力んでいる．[1)]

〔例 3〕 1歳5カ月の男児：だっこをして急ぎ足で歩いていると，子供がだかれたまま，だいている大人と同じ歩調で両手を前後に振っている．

〔例 4〕 成人：映画やテレビ，小説の中の事態に手に汗を握ったり，涙を流したりする．

〔例 5〕 成人：人が走り出すと，自分もつられて走り出す．相手が顔をしかめると，自分もつられてそういった顔つきになる．

〔例 6〕 中学生の男児：父親の不在中，普段父親が座っている椅子に，すま

して座っている.

〔例 7〕 成人：テニスのラケットや，ゴルフのクラブを握って，すばらしい模範的ポーズで振りまわしている.

〔例 8〕 成人：有名人（俳優，政治家等々彼らのアイドルやボス）の仕草で口を利いたり類似した身ごなし，服装をする.

例1では「テレビの体操のお兄さん」例2では「重い荷物を持ち上げている人」例3では「歩いている人」例4では「作中の人物」例5では「走り出す人」例6では「父親」例7では「高名なテニスやゴルフのプレイヤー」例8では「アイドルやボス」とそれぞれ自分との区別がつかなくなっているのだと考えることができる.

勿論，この場合にも，自分とモデルとの同一視の程度には，様々な段階がありうる．ほとんど無意識的な段階から，非常に意識的な段階まで，純粋なものから打算的なものまで，いろいろありうるであろう．しかしこのような心理状態が模倣行動をひきおこす原動力として普遍的に働いていることは，ほぼ間違いない．そしてこのような模倣者のモデルとの同一視の心理を可能にするものとして，相手の心情を察し，その心情に共鳴する共感の心理が存在するのだといえる．つまり模倣を成立させる必要な条件として，モデルの心情に意識的，無意識的に共感しうること，少なくとも相手の心情を察し，相手の心の役割を代行しうることが要請される．この点で模倣と共感の心理との間に密接な関係のあることが理解される.

I.3 模倣と共感

このような模倣と共感との関連は，従来，模倣の理論の中で，「それは模倣とはいえない」という理由で拒否されてきた現象を，模倣の中に含めて考えることによってはっきりする.

例えば，動物が同一の種の群の中で，他の個体と同じ動作を次々と行っていく現象——ついばみ行動，航跡飛翔，穴掘り行動等，人のあくびが伝染するこ

とや，それと類似した現象，人の新生児が周囲の運動に同調する現象，こうした現象を，Wallon は労働の節約とか，随伴運動，知覚運動的同一視として説明している．そしてそれは，模倣であるよりもまず反射であり，次に周囲への感染，自己同一化としての情動であるに過ぎないという．確かに，このような動作は，意識的ではない．しかし，そのために模倣の範疇から除くことが妥当であるとは思えない．Wallon も，こうした動作・行動が模倣への直接的準備となりうることは認めている．しかし，模倣の問題を論ずる場合には，そのより反射的・無意識的，あるいは生命的レベルのものと，より間接的，意識的レベルのものとの間に，非模倣，模倣の一線を画することは，無意味であるように思われる．両者は連続しており，そのより基本的次元では，モデルの動作・行動の知覚にひき続いて，同一の動作を反射的にとってしまうことが，そのより副次的次元では，モデルの動作・行動の知覚が，まず意識され，次に同一の動作・行動がひきおこされることが対応している．そしてその際，モデルの動作・行動の知覚と，同一の動作・行動の触発をつなぐものは，知覚されたものの自己への取り込み，自己への同一化である．そしてこの場合にも，それは，より無意識的であるものから，より意識的なものへ——衝動的なものから情動的なものへ，更に理性的，打算的なものへとつながっていくと考えるべきであろう．このように考えるならば，随伴運動や知覚的同一視は，反射であり，周囲への感染，自己同一化としての情動であると同時に，確実に模倣の原型であるといえる．

I.4 模倣と教示

模倣が行われる際に，その模倣がより基本的次元で行われるならば，それは衝動的・無意識的又は思わず知らず自分もモデルと同一の行動をしてしまっている場合であるということができる．それに対して，より副次的次元で行われているならば，模倣は，意識的，打算的に行われている場合である．いずれの場合にも共感の心理が介在している．しかし，無意識的に思わず行われた模倣行

動の場合には，模倣者の心理に比較的・批判的な心の機能が働いていないものと考えることができよう．勿論，それが非常に，非論理的（又は非常識な）行為である場合には，批判的理性が，その非論理性・非常識性によって目覚めることもあるが，大低の場合には，無批判に「つられて」模倣が行われる．このような場合には，模倣行動がモデルの教示に支配されて，又はその教示の暗示的，催眠的効果に影響を受けているに違いない，ということを予想することができる．今，仮に我々の自我を自覚的・理性的部分と，行動的・無自覚的部分に分けて，前者をA，後者をBと名付けると，普通，我々の行動は，この2つの部分の有機的で調和のとれた協同作業の結果であるといいうる．これに対して，模倣者の行動は，モデルのAの部分と，模倣者のBの部分の結合によって生じたといいうる性質のものである．このような結びつきを可能にするものが，ここで問題としている共感の心理である，ということになる．モデル (M) と，模倣者（I）の2人の自我の結びつき方を考えてみると，次のようになる．

モデルMと模倣者Iの自我をそれぞれ，自覚的・理性的部分A，行動的部分B，Bの内，言語的部分B′とすると，A, B or B′による考えうる組は，〔A〕，〔A+B〕，〔A+B′〕，〔B〕，〔B′〕の5通りであるが，この内〔A〕は観察不能であり，且，M〔A〕は，模倣者に影響を与えないので除く．残りの4通りは，

1. 〔A+B〕，自覚的・理性的行動　　2. 〔A+B′〕自覚的・理性的言語行動
3. 〔B〕無批判的・無自覚的行動　　4. 〔B′〕無批判的・無自覚的言語行動

これを，モデルM，模倣者Iの2人に対応させて，上から順に，M_1，M_2，M_3，M_4，I_1，I_2，I_3，I_4 とすると，その組合せは，

① M_1+I_1,	⑤ M_2+I_1,	⑨ M_3+I_1,	⑬ M_4+I_1,
② M_1+I_2,	⑥ M_2+I_2,	⑩ M_3+I_2,	⑭ M_4+I_2,
③ M_1+I_3,	⑦ M_2+I_3,	⑪ M_3+I_3,	⑮ M_4+I_3,
④ M_1+I_4,	⑧ M_2+I_4,	⑫ M_3+I_4,	⑯ M_4+I_4,

の16通りとなる．模倣行動は，この16通りのいずれかの関係にほぼあてはまる．この内，第1，第2行は，意識的なものであり，第3，第4行は，無意識的なものである．

模倣行動と，教示や暗示による行動とは，前者が専ら行動で示されるのに対して，後者が言語的信号によって示されるということ，前者に対して後者の方が，相手に行動をひきおこそうとする意図が幾分大きいということを除けば，両者の構造は全く同じである．簡単な例をあげると，Xが突然走り出すと，Yもつられて走り出す．このとき，もしXが実際に走り出す代りに「走れ」とか「走ろう」と言葉を発したとすると，Yはおうむ返しに「走れ」とか「走ろう」と同じ言葉を発声することがある．しかしこのとき，その言葉の内容が唐突であったり，非常に切迫していたりすると，Xの言葉をそのまま言葉で復唱するだけではなく，その言葉の意味を実行してしまうことがある．このような関係は，更に，「あなたは，いま，鳥となって空を飛んでいます」といったYの状態をXが述べる場合についてもいえる．このような，Xの行動や，言葉をYがそのまま無批判に受け入れて行動に移すかどうかは，その行動や，言葉の内容がYにとって許容できるものであるか，あるいは，Yの理性が麻痺してどのようなものでも受け入れてしまう状態にあるかによって決まってくる．

ここで問題とすべきことは，このような行動のメカニズムを支えているものは，XにとってはYの役割，特に自我Aを，Yの代りに代行することであり，Yにとっては，自分の自我AをXに代行してもらうことである．つまり，人格の分解と，その組み換えである．言い換えると，一つの有機体のもつ心の働きをバラバラに分解して，別々の個体に分け与えることと関係しているわけである．本来，走ろうと思った人が走り，逃げようと思った人が逃げるものであった．このような場合，思考や判断と行動とは，バラバラに分解されておらず，1人の人の，あるいは，1匹の動物の中に一体となって有機的に働いている．しかし現実には，これが思考し，判断する人と，行動する人とに分かつ事が可能となっている．

例えば，命令文の存在は，この社会的分業の存在を示すものである．この分解を可能にしたものは，すでに述べてきた通り，自分以外の人や動物の行動や心情を察し，理解しうる想像力であり，共鳴しうる共感の心理である．問題は，この働きが，人間や動物の学習の背景となっており，動物や人の進歩につ

ながっていることにある．つまり，問題はこの働きが我々の進歩と心の円満な発達を促す一方で，我々の有機的な心の働きをズタズタに分解する可能性を備えている点にあるといえよう．[2)]

Ⅱ.1 心態の分類

共感の上述のような問題を，心および対人関係の反映である文章に素材を求めて検討する．

構文の分類様式の中で，最も心理と関係が深いと思われるものは，心態による分類であろう．心態とは，伊藤（1968）によれば，「文の内容に対する話者自身の心的態度」と定義されている．つまり，話者が受手との人間関係において，どのような心的態度をとっているかによって，文章のパターンが類別される．一般に，会話において，話者は，受手の心情を察して話をし，一方受手も話者の心情をある程度察して話を聞いていることが期待されている．このような共感的要素を取り除いては，会話によるコミュニケーションは成り立たない．更に，話者と受手との社会的役割，所属する階層の違いが，その構文の性質を決定することが予想されるわけである．

心態は，一般に，意志の有無によって，有意志心態と無意志心態とに分けられる．心態の分類には，Jespersen その他，幾つかの分類があるが，ここでは，日本語を研究対象とするので，日本人の分類：伊藤によるものを用いた．勿論，これは言語学の側からの分類であるので，心理学的に検討した場合には，幾分，修正の必要が出てくるものと思われるが，ここでは一応，伊藤の分類をそのまま用いる．

伊藤による心態の分類項目は，次の通りである．

Ⅰ．有意志心態

A．命令・禁止，B．要求・依頼，C．許可，D．勧誘・提案・忠告，E．約束・脅迫・拒否，F．願望，G．選択，H．決意・自発，I．意図・目的，J．計画・予定．

Ⅱ．無意志心態

A. 事実としての叙述, B. 推測, 蓋然性, C. 可能性, 能力, D. 必然性(必然, 義務, 必要), E. 条件仮定—開放条件, F. 仮定—却下条件. G. 譲歩, H. 単なる想念, I. 断言の緩和

Ⅱ.2 分析方法

ある文が話される場合に, 必要とされる心的機能が, 話者に属しているか, 受手に属しているかをチェックする. この問題は, 既述の通り, 人がどの程度, 相手や第3者の心情や立場を推察しうるか, それがどの程度, 文章構造に反映されるか——窮極的には, 人の共感の心理と結びつく問題を明らかにするためのものである.

心的機能は, 知覚, 認識, 判断と推測, 思考, 決定, 感情, 状態, 希望の8項目と, 意志, 行動の2項目を加えた10項目である. 分析は, ある文章：例文Aに対して, その文章は, 上の10項目の内, どの項目は話者に属し, どの項目は受手に属しているかを判定して, チェックする. この分析基準は, あくまでも話者を基準にとってある. 例えば, 話者が受手に命令を発した場合に, 受手がその命令に従って行動するかどうかの判断は, 最終的には, 受手に属するはずであるが, 話者の側からみれば, 受手が話者の命令に従って行動することを期待しているわけであり, 話者の発した文章は, 受手の判断, 決定等の心的機能を代行したものとみなす.

図 1

文　型	命　令	文　例	学校へ行け
		対比文	私は学校へ行きます

項　目	話　者	受　手	対比文
知　覚			
認　識			
判断・推測	○		○
思　考			
決　定	○		○
感　情			
状　態			
希　望			
行　動		○	○
意　志	○		○

更にこの例文Aに対して, もし話者と受手に心的

機能や行動に分裂がない場合には，どのような文章となるかを判断し，これを例文Aの対比文 A′ とし，この A′ についても同様の項目チェックを行った．それぞれの例文およびその対比文は1対として，図1のような1枚のカードにチェックされる．チェックの際，話者と受手で，同一項目が重複してチェックされることもありうる．

Ⅱ.3 心態の基本文例の分析

伊藤による分類に従って，各文型から代表的な例文を数例ずつ抽出して，話者と受手の心的機能の分析を行った．

結果は，表1，表2に示す通りである．表1は，有意志心態，表2は，無意志心態の各分類による文型の分析結果である．

表 1 有意志心態の分析

文型	命令	要求・依頼	許可	勧・提・忠	約束・脅迫	願望	選択	自発・決意	意図・目的	計画・予定
話者	推測・判断 決定 意志	希望 推測・判断	判断 決定 意志	(意志) 判断 決定	判断 決定 行動 意志	希望 意志	判断 決定 希望 意志	判断 決定 行動 意志	判断 決定 意志 (感情)	判断 決定 希望 行動 意志
受手	行動 (状態)	決定 行動 意志 判断	(行動)	(判断) (決定) (行動)	行動	決定 (判断)	行動			
対比	判断 決定 行動 意志 (状態)	判断 決定 行動 意志	判断 決定 行動 意志	判断 決定 行動 (意志)	判断 決定 行動 意志	判断 決定 行動 意志 (希望)	判断 決定 希望 行動			

表 2　無意志心態の分析

	事実	推・蓋然	可能・能力	必　然	条件仮定	条件仮定	譲　歩	単なる想　念	断言の緩　和
					(開)	(却下)			
話者	認識 判断 決定 感情 状態	認識 判断 決定	判断	判断 決定 希望 認識 行動	判断 決定 意志		判断 決定	意志	
受手				行動	判断 行動		状態 行動	判断	

有意志心態においては，10種の類型の内，(命令)，(約束，脅迫)，(許可)，(選択) の4文型は，最も強く受手を拘束し，(要求・依頼)，(勧告・提案・忠告)，(願望) の3文型は，受手の心的機能と行動に委ねる型といえる．これに対して，(自発・決意)，(意図・目的)，(計画・予定)，の3文型は，受手と全く関わりなく話者の心的機能・行動を述べる形をとっており，自己完結的・閉鎖的文型であるといえる．従って，この最後の型の文型では，対比文の必要がなく，他の7種の文型とは，話者・受手の人間関係からみて，全く異質であり，むしろ，無意志心態の文型に近い．以上から，有意志心態の10種の文型は，受手の心的機態に対して，1. 収奪型，2. 依存型，3. 自己完結型の3つに大別され，又収奪型と依存型を開放型に，自己完結型を閉鎖型に分類することも可能である．

無意志心態では，(必然)，(条件仮定—開放)，(譲歩)，(単なる想念) の4型が，やや開放型であるのに対し，残りの5型は，すべて閉鎖型に属する．対比文については，無意志心態では，9種の文型いずれもその必要がなく，その点からは，すべて閉鎖型に属すると考えられる．ただし，(条件仮定—却下) と (断言の緩和) の2文型については，分析不能であった．

以上まとめた文の分類では，話される文の内容による変動が大きいので，例文のとり方によって，話者と受手の心的機能の分担，チェックされる項目に大きな違いが出てくる．その意味から，以上の分析結果は，絶対的なものとはい

えないが，心態の分類によるどの文型が専ら語られるかによって，話者と受手との人間関係のおおよその理解が可能であること，更に，どのパターンの文型には，どのような心的機能の働きがあるかを知ることができると思われる．少なくとも表3における開放型の文型においては，対人関係の心理的洞察と理解――受手や第3者の心情の洞察と理解が必須のものであると考えることができる．

表 3　文型の対人関係分類

有意志心態	収奪型 命令，約束，脅迫，許可，選択 依存型 要求・依頼，勧告，提案・忠告，願望	開放型
	自己完結型 自発，意図，目的，計画，予定	閉鎖型
無意志心態	事実，推測・蓋然性，可能，能力（準開放） 必然，条件仮定―開放，譲歩，単なる想念 （分析不能） 条件仮定―却下，断言の緩和	閉鎖型

Ⅱ.4　教示および暗示文の分析

相手の心の中に立ち入って行く特殊な文の用い方としては，教示文や暗示文が考えられる．そこで次に，催眠暗示の際に術者が，被術者に話りかける暗示文と，催眠深度を測るために工夫された言語暗示リストについて同様の分析を試みた．

暗示文の文例は，催眠関係のテキストの中に紹介されている典型例を，各種の催眠例から28例抽出した．

催眠深度測定の言語暗示リストは，Barry-Mackinnon-Murray による5項

表 4

	催　眠	
話　者	判断	26
	決定	26
	認識	9
	知覚	5
	感情	3
	状態	2
	同意	2
	意志	1
受　手	状態	26
	行動	16
	認識	16
	感情	10
	知覚	10
	判断	3
	決定	2
対比文	状態	25
	決定	25
	判断	24
	認識	21
	行動	16
	知覚	12
	感情	8
	意志	1

サンプル 28

表 5

	バリ・マッチノンマレイ	
話　者	認識	3
	判断	3
	決定	3
受　手	状態	2
	行動	2
対比文	認識	5
	判断	5
	決定	5
	状態	5
	行動	5

サンプル 5

表 6

	ファーノー	
話　者	認識	9
	判断	9
	決定	9
受　手	状態	8
	感情	6
	行動	4
	知覚	2
対比文	認識	9
	判断	9
	状態	9
	決定	9
	感情	6
	行動	4
	知覚	2

サンプル 9

目と，Furneanx の言語暗示リスト17項目の内 1～9 の 9 項目である．

結果は，表4，表5，表6の通りである，表内の数値は，該当する例文の数を示している．一般の催眠暗示文では，話者（術者）は，判断，推測，決定，等の心的機能を分担しているのに対して，受手（被術者）は，状態，行動，認識，感情，知覚，等の心的機能を分担していることが分る．これに対して，対比文では状態，決定，判断・推測，認識，行動，知覚，感情，が高い頻度を示している．催眠暗示の文章では，一般に「あなたはAさんを見ることができな

くなってしまいました」といった具合に，話者は受手の心的機能をほとんど代行し，受手は単にある状態や行動をとることを期待されているわけである．この場合，話者は，受手の心情を代行すること，受手は，話者によって語られた状態を理解することが要求されており，話者と受手との人間関係は，非常に開放的なものとなる．Barry-Mackinnon-Murray および Furneaux の言語暗示リストにおいても，この関係は同様である．そしてこの開放型の文章が会話に用いられている場合には，話者と受手との間で，少なくとも一方が，他方の影響を受けやすい状態が出現しているということができる．その最も典型的な例が，上述した術者と被術者の関係である．

〈注〉

1) 同じ例としては，子供を乳母車ごと持ち上げて，階段を昇っていると，乳母車の中の子供もやはり「ウンウン」と力んでいる，といった場合がある．

2) 産業構造，生産手段の分化，社会階層の分化と，この問題は無関係ではありえない．

文法は，社会的対人・対物関係の構造を抽象化したものとして，捉えることができる．

〈主な参考文献〉

① 伊藤健三　心態の表現，研究社，1968

② 波多野完治他監修　学習心理学ハンドブック，金子書房，1968.

③ ピアジェ，J. 模倣の心理学，大伴茂訳，黎明書房，1968. (Piaget, J. La formation du symbole chez l'enfant, 1923)

④ 下中邦彦編　心理学辞典，平凡社，1968.

⑤ ワロン，H. 認識過程の心理学，滝沢武久訳，大月書店，1962. (Wallon, H. De lácte à la pensée—Essai de psychologie comparée. 1942)

(1973年12月提出)